

SLAVIC-EURASIAN RESEARCH CENTER NEWS

No. 167 February 2023

研究の最前線

国際シンポジウム「ウクライナとロシアの生存戦略：開戦から1年を迎えて」 開催予告

センターの生存戦略研究プラットフォームは、ロシアによる大規模なウクライナ侵攻開始（2022年2月24日）から約1年となる2023年2月20日（火）～21日（水）に、国際シンポジウム「ウクライナとロシアの生存戦略：開戦から1年を迎えて」を、対面・オンライン併用のハイブリッド形式で開催します。これは、生存戦略研究プラットフォームの全体集会を兼ねています。

生存戦略研究では、帝国主義が推進したグローバル化で特徴付けられるおよそ1870年代から今までを「長い20世紀」と捉えることを提案しています。ウクライナ戦争は世界規模でその終焉を強く印象付けていますが、とりわけ東アジアでは、中国の超大国化が日本にとっても実存的な挑戦となっています。したがって、今回ウクライナ戦争をめぐるシンポジウムを開催するにあたり、長い20世紀の文脈で中国について考えることは有益だと思います。グローバル冷戦史の大家である

オッド・アルネ・ウェスタッド教授（イェール大学）は、その趣旨に共感して基調講演を行うことをご快諾くださいました。それに続くラウンドテーブルでは、センターと交流協定のあるユニバーシティ・カレッジ・ロンドンの2名の研究者と共に、グローバルな危機の時代にその危機の源泉となっているロシアを今後どのような方向で研究できるかについて議論します。昼食を挟んだ生存戦略研究ユニット会議では、国際政治・経済部門、政治・歴史部門、文化・言語部

SRC International Symposium of the Survival Strategies Platform

Survival Strategies of Ukraine and Russia

A Year On from the Outbreak of War

ウクライナとロシアの生存戦略：開戦から1年を迎えて

PROGRAM

February 21 (Tue)

Plenary Meeting of the Platform for Explorations in Survival Strategies
Keynote Lecture: 10:00-11:00
Miki Arai, *Waseda University*

Roundtable: Ends of Empire: Lessons from Russia 11:15-13:00
Aleks Fedotova, Diane Kowalczyk, Norihito Nagamura

Brainstorming Session: Research Agenda at our Platform 14:15-15:30 (Japanese)
Akhiro Iwawata, Tomohisa Uyama, Daishiki Yachi

Symposium on Ukraine and Russia
Opening Remarks: 16:00-16:10
Tomohisa Uyama

Session 1: Politics in Wartime: The Survival of Ukraine and the Survival of Political Actors 16:10-18:10
Srihy Kundlik, Shinya Nishio, Arar of Oshagan

February 22 (Wed)

Session 2: Russian Economy in Wartime: Demography, Gas and Foreign Trade 9:30-11:30
Sergey Zakharov, Viab Veremak, Michiaki Hattori

Session 3: War, Art and Media: Survival Strategies of Ukrainian Culture 13:00-15:00
Anelia Glaser, Volodya Dzhuk, Vse Volodya, Roshina

Session 4: The Present and Future of Historical Research in Ukraine 15:15-16:45
Volodymyr Panchytskiy (Online), Taisai Sudo (Onsite), Genmadi Korolev (Online)

General Discussion 17:00-18:10
Taruus Kaurio, Yoshitaka Uchida

LANGUAGE English
使用言語：英語（日本語も可）
except the Brainstorming Session in Japanese

Venue
Room 403, Slavic-Eurasian
Research Center (SRC),
Hokkaido University, Japan
& Online via Zoom

ACCESS MAP

Date February 21-22, 2023 All times are Japan time (GMT+9)

Details & Online Registration ウェブでの参加登録をお願いします
<http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/sympo2023sp>
Registration Deadline: February 20, 2023 at midnight (JST)

Organization
Platform for Explorations in Survival Strategies at the Slavic-Eurasian Research Center,
Hokkaido University
Co-sponsored by JSPS KAKENHI Grant Numbers 19H01243 and 19H03619
Supported by Japan Consortium for Area Studies (JCAS)
contact: src22@slav.hokudai.ac.jp

門の代表者がそれぞれ、現在どのような問題意識をもって、今後どのような研究課題に取り組んでいくかについて報告し、参加者と意見交換します。

ウクライナとロシアに関するシンポジウム本体は、ウクライナ政治、ロシア経済、ウクライナ文化、ウクライナの歴史研究に関するセッションと、総合討論という構成です。いずれの分野でも、戦争は国家・国民の生存に関わる実に多くの困難な問題をもたらしていると同時に、問題への対処の中で新しい可能性も生まれており、それらに関する多角的な分析の成果が提示される見込みです。報告者としては、総合討論で基調発言をするタラス・クジコ教授をはじめ、センターの元外国人研究員である懐かしい方々も参加します。また、何人かはウクライナからオンラインで参加する予定で、現地の雰囲気伝えてくださるものと思います。全体として、ウクライナとロシアの抱える課題と将来の展望、ウクライナ研究・ロシア研究のあり方について、率直な議論が交わされることを期待しています。[宇山・長縄]

SRC International Symposium of the Survival Strategies Platform Survival Strategies of Ukraine and Russia: A Year On from the Outbreak of War

February 21 (Tue)

Plenary Meeting of the Platform for Explorations in Survival Strategies

10:00–11:00 **Keynote Lecture**

Odd Arne Westad (Yale University)
“Chinese Empires since the 1890s” (Online)
Moderator: David Wolff (SRC) (Online)

11:15–13:00 **Roundtable Ends of Empire: Lessons from Russia**

Alena Ledeneva (University College London)
“Informality, Survival Practices, and Living with Uncertainty”
Diane Koenker (University College London)
“How Far from Moscow? Soviet History and Its Challenges”
Norihiro Naganawa (SRC)
“An Anarchist Turn? Toward a Transnational History of Russia’s Empire”
Moderator: Yoko Aoshima (SRC)

14:15–15:30 **生存戦略研究ユニット会議 [日本語]**

岩下明裕 (SRC) 「地政治から考える生存戦略: コロナ、ウクライナと境界研究」
宇山智彦 (SRC) 「国家の生存と人々の生存: ロシア・ウクライナ戦争の世界史的意義に寄せて」
安達大輔 (SRC) 「スラブ・ユーラシア文化研究の再構想: メロドラマ・アーカイブ・多言語」

Symposium on Ukraine and Russia

16:00–16:10 **Opening Remarks**

Tomohiko Uyama (SRC)

16:10–18:10 **Session 1 Politics in Wartime: The Survival of Ukraine and the Survival of Political Actors**

Serhiy Kudelia (Baylor University)
“Ukraine’s Political Regime under the Test of War”
Silviya Nitsova (University of North Carolina at Chapel Hill)
“The Extremely Rich during the Politics of the Extraordinary: Oligarchic Networks of

Influence and the Russia-Ukraine War”

Ararat Osipian (New University in Exile Consortium)

“World Bank Comes to Ukraine: University Mergers, Protests, Corruption, War” (Online)

Discussant: Masatomo Torikai (Osaka University)

Moderator: Hideya Matsuzaki (Tsuda University)

February 22 (Wed)

9:30–11:30 **Session 2 Russian Economy in Wartime: Demography, Gas and Foreign Trade**

Sergey Zakharov (Nantes Institute for Advanced Study)

“Demographic Trends in Contemporary Russia: The Era of ‘Black Swans’”

Vitaly Yermakov (Oxford Institute for Energy Studies)

“Russian Gas in 2022 and Beyond: Caught in the Geopolitical Controversy”

Michitaka Hattori (SRC)

“Analyzing Russia’s Foreign Trade Performance with No Russian Official Statistics Available”

Discussant: Yuko Adachi (Sophia University)

Moderator: Shinichiro Tabata (SRC)

13:00–15:00 **Session 3 War, Art and Media: Survival Strategies of Ukrainian Culture**

Amelia Glaser (University of California San Diego)

“Our News Feed Is a Gallery of Loss: Translating and Archiving Contemporary Ukrainian Poetry”

Yuliya Ilchuk (Stanford University)

“‘Here’s your Language, Woman, Shoot from It’: Ukrainian Women’s Poetry During the War”

Ana Hedberg Olenina (Arizona State University)

“A Quest for the Public Sphere: Ukrainian Documentary Cinema and Material Cultures of Solidarity”

Discussant: Daisuke Adachi (SRC)

Moderator: Shiori Kiyosawa (SRC)

15:15–16:45 **Session 4 The Present and Future of Historical Research in Ukraine**

Volodymyr Potulnytskyi (M.S. Hrushevsky Institute of Ukrainian Archaeography and Source Studies, National Academy of Science of Ukraine)

“The Current Situation with Historical Science in Ukraine: Towards Conceptual, Methodological and Generational Aspects of the Problem” (Online)

Taissa Sydorchuk (Omeljan Pritsak’s Research Centre for Oriental Studies of National University of Kyiv-Mohyla Academy)

“Preservation of the Unique Orientalist Collection of Omeljan Pritsak at National University of Kyiv-Mohyla Academy in Conditions of War” (Online)

Gennadii Korolov (University of Warsaw)

“Ukraine and Decolonization of the History of East Central Europe” (Online)

Moderator: Yoko Aoshima (SRC)

17:00–18:10 **General Discussion**

Keynote Remarks:

Taras Kuzio (National University of Kyiv-Mohyla Academy)

“The Kremlin’s Invasion of Ukraine: How It Has Fundamentally Changed Russia-Ukrainian Relations and Eurasian Studies”

Yoshihiko Okabe (Kobe Gakuin University)

“The Impact of Russia’s Invasion of Ukraine on Japan”

Moderator: Tomohiko Uyama (SRC)

2022年度冬期国際シンポジウムの開催

2022年12月14～16日に恒例の冬期国際シンポジウムが開催されました。今年のテーマは、「永久凍土：気候変動と資源開発は北極域の生活をどう変えているのか」でした。センターは、北海道大学北極域研究センターなどとともに、文科省の北極域研究加速プロジェクト（ArCS II）を実施しており、今回の国際シンポジウムは、センターの生存戦略研究プロジェクトに加えて、ArCS IIの社会文化課題「温暖化する北極域から見るエネルギー資源と食に関わる人間の安全保障」と海外交流研究力強化プログラム「地域社会・開発・文化からみた北極と東アジア連鎖」、東北大学東北アジア研究センターが主催しました。



会場の様子

センターの国際シンポジウムとしては3年ぶりに対面のみで開催されました。外国からは、フィンランド、米国、ロシアなどから計11名が参加し、国内からの参加者を含めると、58名の参加者となりました。懇親会（ホテルマイステイズ札幌アスペン）やエクスカーション（ウポポイ）も予定通り行われ、コロナ禍前の国際シンポジウムにかなり近い形での開催とすることができました。

ArCS IIでは学際的な研究が行われていることから、普段のセンターの国際シンポジウムとは異なり、自然科学の研究者も多数参加しました。各セッションでは、永久凍土の変化、その上で営まれる先住民（サハ人を含む）の生業その他の経済活動、先住民の文化やアイデンティティ、その持続的発展の可能性などについて議論がなされました。全部で19の報告のうち、10の報告はロシアのサハ共和国に関わる報告となりましたが、これは、これまでArCS IIの社会文化課題で行ってきた北極域研究の多くが同共和国での現地調査や同共和国のデータ分析に基づいていることを示すものでした。2～3年間、直接会って話をするのができなかったこともあり、対面での議論には大変力が入りました。外国の研究者との間では、今後の研究協力の拡大についての話し合いもなされ、得るところの大きいシンポジウムとなりました。〔田畑〕



フロアからの質問

CNCISI（国際19世紀研究センター）に加盟

スラブ・ユーラシア研究センターは、19世紀研究の初の国際ネットワークである国際19世紀研究センター（Centre for Nineteenth-Century Studies International、以下 CNCISI）に、ダーラム大学を中心とする30以上の機関とともに加盟しました。今後この分野での国際的な研究協力を進めます。



議定書の発効を喜ぶベネット・ゾン CNCISI センター長（右）と
ダーラム大学のカレン・オブライエン副学長（左）

CNCISIは、19世紀研究のための国際的な組織が存在していなかったことを背景に、バーミンガム、ダーラム、オックス、ソルボンヌ、マギル、モナシユ各大学の専門機関によって2017年に設立されました。世界の19世紀研究

の発展について知識を共有することで、研究機関どうしの対話を促し、現在の思想状況の中で19世紀研究を新たに構想し直すことを目指しています。具体的な目標としては、①育成 ②教育 ③研究 ④組織運営を主要テーマとして、国際的な研究プロジェクトの発展、研究者や大学院生の相互受け入れ、関連イベントの開催を行い、各種学会や博物館・美術館・図書館、大学の研究センターと協力しながら、組織の枠を超えた交流の機会を設けます。また博士課程で国際的な指導を共有する機会の提供や、国際的なイベントの広報・情報交換もなされます。さらに19世紀研究のための国際学会を設立すべく、2024年ダーラム大学での立ち上げを目指して、現在順調に準備が進められています。

今回改訂された議定書には当センターのほかにインドやルーマニア、デンマークの研究機関も署名しており、またアメリカのスミソニアン博物館も参加予定です。19世紀研究の初の国際的な組織がこのように多国籍・多分野の交流に開かれたものであることは意義深くかつ幸運なことであり、その中でアジア・日本の拠点としてSRCが果たすべき役割は大きいと言えるでしょう。なお現在は安達准教授が運営委員に名を連ねています。[安達]

生存戦略研究

昨年4月から始動したこのプロジェクトでは、数多くの研究会を組織してきました。12月に日本語のサイトを先行して公開していますので、その軌跡はそこで確認できます。

<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/srcw/>

また本プロジェクトは、海外との研究機関との連携の深化も重要な柱としています。ここでは、秋から今までの取り組みについて一部を紹介します。

オーストリア科学アカデミー（ウィーン）のイラン研究所には、パオロ・サルトリ氏の率いる The Committee for the Study of Islam in Central Eurasia が置かれています。9月27日にはスラ研との初の共催企画として、ワークショップ Russia's Muslims and Global Radicalism を行いました。プログラムはこちらから：<https://www.oeaw.ac.at/fileadmin/kommissionen/islam-centraleurasia/Programm-SICE-Russias-Muslims-V19-08-2022.pdf>

この委員会との協力は、次年度も進展させることが決まっており、6月の最終週にはサマースクール、9月13・14日にはMuddying the Waters: Towards a History of the Caspian Seaというシンポジウムが予定されています。とくに後者は、委員会のメンバーである野田仁氏も企画に加わっており、スラ研と東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所との連携事業の一環としても位置付けられます。

昨年9月にはまた、宇山研究員がカザフスタンの大学・研究機関を訪問し、ロシア革命・内戦期のカザフ自治運動と現在のカザフスタンの生存戦略について、講演と意見交換を行いました。主な訪問先は、アバイ記念カザフ国立教育大学、哲学・政治学・地域研究研究所（以上アルマトウ）、ナザルバエフ大学、カザフ人文法科大学（以上アスタナ）、東カザフスタン大学（オスケメン）、アリハン・ボケイハン大学（セメイ）、エセノフ大学（アクタウ）です。

ロシア学士院スラブ学研究所との共同研究は、組織レベルではなく無所属の個人レベルでの交流という形で進めています。具体的には、野町研究員が6月23日に『民族言語学および社会言語学観点によるスラブの文字システム』を共通題目としたセミナーを組織し、第1セッションではビリヤナ・シキミッチ、マリヤ・ヤシンスカヤ、オリガ・ペロワ各氏が墓標の言語と文字の分析を、第2セッションでは清沢紫織、オクサナ・オスタプチュク両氏が東スラブ諸語におけるラテン文字化について分析しました。また、12月5日にはバルカン諸言語の専門家であるマリヤ・モロゾワおよびアレクサンドル・ルサコフ各氏が『南スラブ諸方言における言語的複雑性：定量分析は何を示すか』という題目で共同報告を行いました。難しい時代ではあえませんが、健全な思想の研究者との学術交流を断つことで生じる学問の停滞は避けねばならないので、今後も何らかの方法で継続することを検討しています。

本プロジェクトでは当初、カザン連邦大学に海外拠点を置くことを構想していましたが、その実現は遠のいてしまいました。とはいえ、研究者間の交流は絶やさないとこの観点から、10月にディリャラ・ウスマノヴァ、レイラ・アルマゾヴァ両氏を招へいしました。10月15日には、法政大学で行われたロシア史研究会の年次大会で、磯貝真澄氏（千葉大学）を討論者にお招きしてRussia's Islamic Modernism Reconsideredというミニパネルを組織しました。ウスマノヴァ氏は、ミヒヤエル・ケムパー（アムステルダム大学）、パオロ・サルトリ両氏と共に、イスラーム近代主義（ジャディディズム）研究を再考する論集を計画しており、アルマゾヴァ氏と長縄も参加予定なので、とてもよい意見の交換と共有ができました。

11月には、シカゴで催された北米のスラヴ・ユーラシア学会（ASEEES）に合わせて、ワシントンD.C.のケナン研究所とハーヴァード大学のデーヴィス・センターでEurasia from the Eastというセミナーを企画しました。これは、ウクライナ戦争がユーラシア大陸、とりわけ東アジアと中東に与えるインパクトについて議論することを目的としていました。ケナン研究所で岩下研究員が合流した以外は、ウルフ研究員、田畑研究員、長縄の3名が2つの研究所でトークをし



ケナン研究所のセミナー

した。そのタイトルを並べますと、岩下研究員がThe “Second Ice Age” and a Crisis for Japan、田畑研究員がThe Influence of Sanctions on the Russian Economy、長縄がVicious Alliance? Russia and Saudi Arabia in a Shifting World、ウルフ研究員がUpdate on the “Friendship without Limits”: Russia-China Relations in Recent Monthsとなります。ケナン研究所のものでは、対面で20名ほど、オンラインで100名近い視聴者が集まりました。デーヴィス・センターでのセミナーは、ティモシー・コルトン教授が司会をされ、ウクライナ研究所のセルヒー・プロヒー教授も参加され、その後、両先生と夕食をご一緒できました。2つのセミナーの様子は、ユーチューブでもご覧いただけます。

ケナン研究所での模様：<https://www.youtube.com/watch?v=kbSAvV-ujmY>

デーヴィス・センターでの模様：<https://www.youtube.com/watch?v=awl3vPd3Zzc>

なお、プロヒー教授は今年5月末から7月はじめまで外国人招へい教員としてスラ研に滞在予定です。[長縄]

人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業 「東ユーラシア研究」プロジェクト2022年度四拠点全体集会開催

2023年1月21日に「東ユーラシア研究」プロジェクト2022年度四拠点全体集会が開催されました。今年度から開始した「東ユーラシア研究」プロジェクトでは、各拠点がそれぞれの研究テーマに基づき研究を進めてきましたが、今回は四拠点による最初の全体集会となりました。セッション1では各拠点の研究体制・成果の報告とともに、「東ユーラシア」という地域概念をいかに考えるべきか、ウェルビーイングとは何かということを中心に討論が行われました。セッション2では、各拠点の研究分担者がそれぞれの専門テーマについて発表しました。4名の発表者はそれぞれ異なるディシプリンから、異なる地域の異なるテーマについて報告しましたが、図らずも相互に密接に絡み合う問題群を扱っていることが確認されました。40名弱の対面参加者の間では熱い議論が交わされ、今後の拠点間研究協力の発展を期待させるものとなりました。会議は、以下のプログラムのもとで開催されました。[井上]



セッション1（拠点長パネル）の様子

1月21日（土）（ハイブリッド開催、対面会場：私学会館アルカディア市ヶ谷）
10:00-10:50 基礎講演：高倉浩樹（東北大学東北アジア研究センター）
11:10-12:20 セッション1（拠点長パネル）「東ユーラシアの文化衝突とウェルビーイング」

パネリスト:

高倉浩樹 (代表、東北大学東北アジア研究センター) 「マイノリティの権利とメディア」
島村一平 (副代表、国立民族学博物館) 「宗教とサブカルチャー」
岡田浩樹 (神戸大学大学院国際文化学研究科) 「少子高齢化と葛藤」
岩下明裕 (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター) 「越境とジェンダー」

13:30-15:30 セッション2 「東ユーラシアにおけるウェルビーイングと不確実性」

発表1 小坂田裕子 (中央大学法務研究科)
「アイヌ施策推進法を巡る議論と『先住民族の権利に関する国連宣言』」
発表2 滝澤克彦 (長崎大学多文化社会学部)
「宗教とウェルビーイングをめぐる一考察—ベトナム人技能実習生死体遺棄事件の事例から」
発表3 小川さやか (立命館大学先端総合学術研究科)
「自身の系譜を打ち立てる—アジアとアフリカの間のSNSを介した取引を事例に」
発表4 萩洪芳 (ミシガン大学日本研究センター)
「越境とジェンダー—グローバルな家族と越境する親密性」
コメント1 川口幸大 (東北大学大学院文学研究科)
コメント2 池畑周直美 (北海道大学公共政策大学院)

15:50-17:00 拠点間の交流事業についての意見交換会

境界地域研究ネットワークJAPAN (JIBSN) セミナー 2022 「危機のなかの境界地域」開催：3年ぶりに対面で

2022年10月19日(土)にJIBSNセミナーが対面(石垣市・竹富町役場庁舎)・一部オンラインで開催されました。ホストの前泊正人・竹富町長の下、ゲスト参加の中山義隆・石垣市長、(石垣と姉妹都市でもある)稚内市の工藤弘市長、小笠原村から渋谷正昭村長、与那国町から糸数健一町長らが登壇し、10の境界自治体からの報告がなされました。ロシアのウクライナ侵攻とコロナ禍に直面したそれぞれの地域の現場からの意見交換は、八重山毎日新聞、熊本日日新聞、北海道新聞、毎日新聞(web版)などで大きく取り上げられました。19日の午前中は「石垣のなかの台湾」、20日は「最南端」波照間島視察など対面ならではのボーダーツーリズムも3年ぶりに実施され、参加者には大好評でした。

当日の議論の様子は下記から視聴できます。[岩下]

<https://www.youtube.com/watch?v=rXIaPUF4yD0>



セミナーの様子

UBRJ・EESセミナー「危機のなかのボーダースタディーズ」開催

ラウンドテーブル「危機のなかのボーダースタディーズ」（新春スペシャル 生存戦略 & 実社会共創研究セミナー）が、2023年1月8日（日）11:00～13:00に開催されました。これは2022年11月に石垣市で開催された境界地域研究ネットワークJAPANのセミナーへの研究者によるフォローアップ版で、NPO法人日本国境地域センター（JCBS）との共催で企画されました。セミナーでは、ロシアのウクライナ侵攻を受けたアジア諸国や日本国内の対応、コロナ禍と向き合う自治体やツーリズムのあり方など、実務者の観点も交えながらの討論がなされました。

パネリストは田村慶子、地田徹朗、花松泰倫、高田喜博、池炫周直美ほかでした。下記から当日の議論の様子が視聴できます。[岩下]

<https://www.youtube.com/watch?v=zS3dwFe0jZ4>

ラウンドテーブル「東部ヨーロッパ境界地域に関する歴史研究の再考ーロシアによるウクライナ戦争の余波」開催

2022年12月1日（木）、センターにてラウンドテーブルRethinking Historiography of the Eastern European Borderlands in the Aftermath of Russia's War in Ukraineを開催しました。バルト史を専門とするキャサリン・ギブソンさん、ウクライナ史を専門とするアントン・コテンコさん、ベッサラビア史を専門とするアンドレイ・クスコ（クシュコ）さんという、3名の若手歴史研究者を招聘し、東部ヨーロッパを対象とする歴史研究の今後のあり方について、議論をしました。

ロシアによるウクライナ侵攻に際して、歴史解釈が侵略の正当化のために使われたこともあり、今後、ロシアに隣接する地域の歴史研究をどう再構築するべきなのかが重要な課題となっています。プーチン政権は、時に過激な民族主義に訴えつつ、他方でロシア帝国やソ連の後継者としての権利を振りかざしながら、暴力的に国境線を変更しようとしています。主権国家のボーダーラインの正当性がナショナルな歴史のなかにあると考えるのならば、この地域において、ナショナル・ヒストリーが強化され、それを基盤として相互に切り離された歴史認識が人々を一層分断していく可能性もあります。近年興隆した帝国史は越境や相互関係を重視した歴史的な見方を念頭に置いていましたが、現在、「帝国」は植民地的抑圧の象徴としての意味を強めつつあります。ソ連崩壊後に文書館は外部に大きく開かれましたが、現在、それへのアクセスは再び困難になっています。私たちは、この30年の間に見出された新しい歴史研究のパーспекティヴが次々と暗転しているのを感じています。



ラウンドテーブルの後で

このような状況の中、歴史研究はどのような点を、どういう方向で再考するべきでしょうか。分析枠組みとしてのナショナリズム、その裏返しとしてのナショナル・インディファレンス論、ナショナルなプロジェクトから逸れる様々な地理的・集团的想像力のオルタナティヴ、グローバル・ヒストリー、「ロシアの諸帝国」の帝國的統治戦略、多様な民族の帝国との関わり方、今後の歴史研究の資料とテーマ、歴史と政治の関係などをキーワードにしつつ、率直に意見を交換しました。これらの議論の詳細は、*Acta Slavica Iaponica*に掲載予定です。

さらに、12月3日には、同じ3名のゲストとともに早稲田大学を訪れ、小森宏美さんのご協力のもと、「東部ヨーロッパ境界地域におけるナショナリズムの多面性 (Multifaceted Nationalism in the Eastern European Borderlands)」と題するワークショップを開催しました。巨大な帝國的諸国家の狭間に位置するヨーロッパ東部境界地域の住民のアイデンティティや秩序意識の問題は、大国に翻弄される人々の歴史という意味を超えて、巨大な帝國的諸国家を境界から揺るがし、地域秩序を再編するという意味でも重要です。当ワークショップでは、国内から若手歴史研究者が多く参加し、実りの多い議論ができました。ゲストの3人の歴史家も、ワークショップでの質問のレベルの高さに驚き、自分の国で研究報告してもこんな質問は出ないよ、と呟いていました。[青島]

2023年度外国人招へい教員 (外国人研究員)の決定

2023年度の外国人招へい教員 (外国人研究員)は、以下7名の方が決まりました (姓のアルファベット順)。北大での職名は全員特任教授となります。ロシアによるウクライナ侵略戦争は長期化し、深刻な問題であり続けていますが、今回の採用者には強力なウクライナ研究者の方々が含まれています。関連して生存戦略研究プラットフォームでロンドン・ウクライナ研究所のオレーシャ・フロメイチュク (Olesya Khromeychuk) 所長の招へいも決定しています。センターにとって宿願でもあるウクライナ研究を組織的に発展させる用意は整ったと言えます。なお滞在期間については変更の可能性があります。[安達]

イリシェフ, イルドゥス グバイドゥロヴィチ (Ilishev, Ildus Gubaidullovich)

本務機関・現職：独立研究者、ロシア科学アカデミー・ウファ科学センター歴史言語文学研究所元所長 (ロシア)

研究テーマ：ロシアの遅れた民主化としてのウクライナ戦争

滞在期間：2023年5月10日～7月10日

担当教員：長縄

グリーンバーグ, ロバート デイヴィッド (Greenberg, Robert David)

本務機関・現職：オークランド大学人文学部教授 (ニュージーランド)

研究テーマ：旧ユーゴスラビアからウクライナにいたる言語アイデンティティをめぐるナラティヴ：言語地位と言語計画に対する戦争のインパクト

滞在期間：2023年5月12日～7月12日

担当教員：野町

ツェデンダンバ, バトバヤル (Tsedendamba, Batbayar)
本務機関・現職：モンゴル科学アカデミー (モンゴル)
研究テーマ：ヨシフ・スターリンとソ連のモンゴル系民族の領土：ブリヤート、カルムイク、タンヌ・トウヴァ (1930-1944)
滞在期間：2023年9月15日～12月15日
担当教員：ウルフ

プロヒー, セルヒー (Plokhii, Serge)
本務機関・現職：ハーバード大学ウクライナ研究所教授 (アメリカ)
研究テーマ：2014年のクリミア併合に対する国際的な反応
滞在期間：2023年5月26日～7月26日
担当教員：ウルフ

ミューレ, エドゥアルド (Mühle, Eduard)
本務機関・現職：ミュンスター大学歴史学部教授 (ドイツ)
研究テーマ：近代におけるスラヴ人とスラヴ主義
滞在期間：2023年8月1日～10月31日
担当教員：野町

リポヴェツキー, マーク ナウモヴィチ (Lipovetsky, Mark Naumovich)
本務機関・現職：コロンビア大学スラヴ言語学科教授 (アメリカ)
研究テーマ：トリックスターのモダニティ：ソビエトおよびポストソビエト的シニカルさのナラティヴ
滞在期間：2023年11月1日～2024年1月10日
担当教員：安達

リャブチュク, ミコラ ユーリ (Riabchuk, Mykola Yuri)
本務機関・現職：ウクライナ科学アカデミー政治・民族問題研究所主任研究員 (ウクライナ)
研究テーマ：地政学の復活？ロシアのウクライナ戦争と新グローバル秩序への展望
滞在期間：2023年9月23日～2024年3月22日
担当教員：宇山

専任研究員セミナー

ニュース前号以降、専任研究員セミナーが以下のように開催されました。

2022年11月28日：野町素己

報告：On a Particular Usage of the Locative and Accusative Cases in Burgenland Croatian
コメンテータ：Marc L. Greenberg (カンザス大学教養学部／SRC)

今回提出されたペーパーは、オーストリアとハンガリーの国境地帯ブルゲンラントで行われるクロアチア方言を対象に、場所を表す前置詞なし処格・対格を分析するものでした。

まず前置詞なしから前置詞を伴うというスラブ諸語の格表示の分析的傾向が説明された後、そうした一般的な傾向に逆行するかのよう、ブルゲンラント・クロアチア方言では前置詞なし処格・対格が高頻度で使用される事実が挙げられます。その具体的な用法が文法・意味の両面から解説された後、古代スラブ諸語との類型論的比較により、この現象が古代スラブ諸語の古風な要素を直接的に継承したものではないことが指摘されました。また、同様の現象はブルゲンラント・クロアチア方言が由来する今日のクロアチア・チャ方言でも観察されるものの、文献の詳細な分析を行うことで、両者における当該現象の発生時期が異なると想定されることから、ブルゲンラントにおける前置詞なし処格・対格の使用は、チャ方言での音的弱化が根本にはある可能性は残るが、あくまでもブルゲンラントで発生したという推定がなされます。さらに、周辺地域のドイツ語方言からの影響を指摘する先行研究に対し、その可能性も否定できないものの、逆に、ブルゲンラント・クロアチア方言におけるこの現象が現地のドイツ語方言に影響を及ぼした可能性もあることが示されました。

このように、このペーパーは、通時的スラブ諸語研究、通時的クロアチア方言研究、現代方言研究、地域言語学、類型論といった複数の観点から、当該現象の由来と位置づけ、文法、意味論的特徴を包括的に明らかにすることを試みるものでした。

コメンテータのグリーンバーグ教授は、継承と革新をキーワードに、他のインド・ヨーロッパ諸語と比べたスラブ語の格の歴史的变化の特徴を解説し、スラブ方言学では伝統的に統語論研究が非常に手薄である現状に鑑み、本ペーパーに一定の意義を与えました。しかしながら、ハンガリー語との言語接触により深く踏み込む必要性、冠詞が表す定性・不定性との関連が見落とされていることを批判的に論じました。

質疑応答において、出席者からは、帝国内の言語政策や教育がこの現象に与えた影響や、文章語形成における教会の役割、言語接触における人々の移住の方向性や地理の影響など言語外の要素を問う質問が多く出されました。[安達]

12月12日：長縄宣博

報告：Emancipation Betrayed? Shamil Usmanov's Account of the Battles with the Orenburg Cossacks

コメンテータ：宇山智彦 (SRC)

今回提出されたペーパーは報告者の新著の一部となる予定の原稿でした。本ペーパーは、タタール人作家が内戦期の体験を語ったとされる小説を史料とし、内戦におけるタタール人の主観を再現しようとする野心的な試みでした。報告者は、この小説を軸にしながら、タタール人が赤軍兵士として成長する過程、内戦時の時代背景、小説が書かれた時代背景を重ね合わせながら議論を進めました。これに対して、コメンテータからのコメント、その後の質疑応答において議論の中心となったのは、史料としての小説の扱い方を巡る諸問題でした。小説の物語と事実の関係、小説の作成過程、小説というジャンルと回想録などの別のジャンルとの差異、小説の読者、社会主義リアリズム小説との差異など、多面的な議論へと発展しました。それ以外にも、歴史的記憶がつけられる契機、赤軍と現地の人々の関係性、プハラとの関係、赤軍における国際軍団の位置づけ・構成・設立経緯、小説の中で描かれる自殺の機能、小説におけるジェンダー問題、地理的な広がり、自伝小説というジャンルの多様な地域への広がり相互の影響関係、intermediaryという概念の定義など、多様な問題について議論となりました。著作の一部として完成される日が待たれます。[青島]

2023年1月19日：仙石学

報告：中東欧諸国の政党政治とウクライナ：ポーランドを中心に
 コメンテータ：林忠行（京都女子大学現代社会学部）

ロシアのウクライナ侵略に伴って注目を浴びているポーランドとウクライナの関係を、ポーランド内政と連関させながら分析する論文です。両国の関係は常に良好だったわけではなく、2010年代後半にはポーランドの与党「法と正義」の「歴史の見直し」路線により、第二次世界大戦中のウクライナ人によるポーランド人虐殺問題が争点化して悪化していたこと、ロシアによる侵攻が始まると同党は世論に追随してウクライナ支援に積極的になったこと、しかしいったん上向いた同党の支持率は、内政・外交の行き詰まりによって元に戻ったことが指摘されています。論文の最後では、ロシア寄りの政策を取り続けているハンガリーの与党フィデスとの比較も試みられています。コメンテータは、ポーランドのウクライナ政策を、EUやドイツ、ロシアとの関係と結びつけて分析する必要性を指摘するとともに、「法と正義」をポピュリスト政党と位置づけることへの疑問を提起し、ポーランドの軍事についても補足しました。他の参加者からは、「犠牲者意識ナショナリズム」の問題、歴史問題と安全保障問題における内政と外交のリンケージの違い、ポーランド国内の地域差などについてコメントがありました。報道では、ポーランドはEUの「問題児」からウクライナ支援の模範生に変貌を遂げたという印象がありますが、その背後に隠れがちな複雑な問題への理解が深まったセミナーでした。[宇山]

1月23日：宇山智彦

報告：ウクライナと中央ユーラシア：歴史的関係とロシアによる侵略戦争の衝撃
 コメンテータ：坂井弘紀（和光大学表現学部）

今回提出されたのは、紀元前4000年からこんにちに至る中央ユーラシアとウクライナとの関係を概観するもので、すでに『内陸アジア史研究』37号に特別寄稿として掲載されています。それは、ウクライナの大部分がユーラシア大陸中央部のステップ地帯の一部であること、モンゴルの侵攻とポーランド・リトアニア国家の影響、ロシアへの併合とその帝国空間での位置づけ、ソ連の中でのクリミア・タタール人の苦難、そして2014年のユーロマイダン革命から2022年のロシアのウクライナ侵略までを描き切るという離れ業でした。コメンテータの坂井先生も、ウクライナをユーラシアの遊牧民世界とつなげて論じる試みは本邦では極めて貴重であると称賛しました。そのうえで、英雄叙事詩『チョラ・バトゥル』が、16世紀半ばのカザン・ハン国の征服について、モスクワとカザンの関係だけではなく、カザンとクリミアの競合も語っていること、そしてこの叙事詩がソ連時代に禁止されつつも、テュルク系の亡命知識人の間で共有されていたことも付け加えました。そこからは、ロシア史やウクライナ史をテュルク語から再構築する可能性も見えてきました。

出席者からは、モンゴル支配が及ばなかった南西ルーシの多様性について考察を深めることの必要性、ステップの交流史と各国史との接合の難しさ、中央ユーラシア史で強制移住が持つ意味、ウクライナ・アイデンティティの位置づけ方など、実に多様な論点が提起されました。宇山研究員が応答の中で、超大国復活をもくろむロシアの帝国主義を清算するには、ロシアが敗北するしかないと言言したところには、今後待ち受ける多大な苦難に対する苦渋が滲み出ていました。[長縄]

研究会活動

センターニュース166号以降、センターが主催・共催した諸研究会活動は以下の通りです（国際シンポジウムを除く）。[編集部]

11月16日 SRCセミナー Georges Mink (ISP, CNRS / College of Europe) “Ukraine—Poland’s Dreamed Neighbour”

11月19日 JIBSNセミナー 危機のなかの境界地域」第1セッション「危機のなかの境界地域 I: 激動する国際情勢」: 中山義隆 (石垣市長)、糸数健一 (与那国町長)、工藤広 (稚内市長)、石橋直巳 (根室市北方領土対策部長)、比田勝尚喜 (対馬市長) & 黒岩良輝 (対馬市役所しまづくり推進部政策企画課長補佐) 第2セッション「危機のなかの境界地域II: コロナ禍と社会の変貌」: 渋谷正昭 (小笠原村長)、前泊正人 (竹富町長)、星京子 (標津副町長) & 西山一也 (標津町企画政策課企画政策担当係長)、遠藤伸樹 (礼文町産業課長)、久保実 (五島副市長)

11月21日 SRCセミナー Ольга Горицкая (Независимый исследователь) “Белорусский и русский языки в современной Беларуси: проблемы взаимодействия” [オリガ・ゴリツカヤ「現代ベラルーシにおけるベラルーシ語とロシア語: 相互関係を中心に」]

11月29日 SRCセミナー David Moon (UCL/SRC) “East-West Knowledge Transfer in Settler Societies: How the U.S. Great Plains Became the ‘American Steppes’”

11月29日 北海道中央ユーラシア研究会 中央アジア映画セミナー「カザフスタンを映す目」 Дарежан Омирбаев (Казахфильм) [ダレジャン オミルバエフ (カザフフィルム)]

11月30日 SRCセミナー Nariman Skakov (Harvard University / University of Tokyo) “Soviet Orientalism and the Late Soviet Avant-Garde”

12月1日 ラウンドテーブル 「東部ヨーロッパ境界地域に関する歴史研究の再考—ロシアによるウクライナ戦争の余波 (Rethinking Historiography of the Eastern European Borderlands in the Aftermath of Russia’s War in Ukraine)」 Catherine Gibson (University of Tartu), Anton Kotenko (Helsinki Collegium for Advanced Studies), Andrei Cusco (Romanian Academy, Iasi)

12月3日 ワークショップ 「東部ヨーロッパ境界地域におけるナショナリズムの多面性 (Multifaceted Nationalism in the Eastern European Borderlands)」 Catherine Gibson (University of Tartu) “Geographical Imaginaries in the Baltic: Mapping Empires, Regions, and Nations”; Anton Kotenko (Helsinki Collegium for Advanced Studies) “The Limits of Self-Representation: Russian Imperial Censorship of Ukrainian Drama, 1881–1917”; Andrei Cusco (Romanian Academy, Iasi) “Between Empires? Bessarabia as a Contested Borderland during the ‘Long Nineteenth Century’”

12月3日 北海道中央ユーラシア研究会 ワークショップ「草原の水系」 David Moon (UCL/SRC) “Were the Steppe Rivers Drying Up? Debates over Environmental Change in the Russian Empire”; Tetsuro Chida (Nagoya University of Foreign Studies) “The Role of Pastoralism in the Recovery from the Aral Sea Disaster in Small Aral Sea Region in Kazakhstan”

12月5日 中村・鈴川基金奨励研究員報告会 伊丹聡一郎(明治大学大学院)「中世ロシアにおける河川ネットワークと政治権力：ノヴゴロド河川賊「ウシクイニク」と宣教師ペルミのステファンの活動を中心に」

12月7日 生存戦略研究セミナー 「極東から世界へ：ウクライナ人とタタール人の移民にみる生存戦略」 オリガ・ホメンコ(オクスフォード大学)「イワン・スウィットと極東満州におけるウクライナ人運動史」、沼田彩誉子(東京外国語大学)「カテゴリーとしてのタタール：移民の「故郷」との関わりにおいて」

12月19日 UBRJ/EES Seminar for Survival Strategic Research Paradorn Rangsimaporn “Central Asia and Southeast Asia: Exploring the Dynamics of Greater Engagement”

12月20日 SRC客員研究員セミナー 中井遼(北九州市立大学)「ラトビアの政党有権者関係：クライエンテリズムの程度を測る」

12月23日 第42回スラブ・ユーラシア研究センター公開講演会 村上勇介(京都大学/SRC)「ラテンアメリカの再左傾化：現状と背景」

12月26日 SRC特別セミナー 「対ロシア経済制裁を読み解く」 中谷和弘(東京大学)「国際法から見た対ロシア経済制裁」、田畑伸一郎(北海道大学)「経済制裁のロシア経済への影響に関する統計分析」

1月8日 UBRJ/JCBS 生存戦略&実社会共創研究セミナー 田村慶子(北九州市立大学)、地田徹朗(名古屋外国語大学)、花松泰倫(九州国際大学)、池炫周直美(北海道大学)、高田喜博(NPO法人国境地域研究センター)ほか

1月10日 特別研究会 「ロシア・ウクライナ戦争の軍事学的考察」 Michael Kofman (CAN, USA) “The Russia-Ukraine War: Lessons and Implications for Warfares”; Vasily Kashin (Higher School of Economics, Russia) “The Russia-Ukraine War: Lessons for Defense Industry and Economics”; Yu Koizumi (University of Tokyo) “Repercussions of the Russo-Ukrainian War: A View from Tokyo”

1月12日 特別研究会 「ロシア・ウクライナ戦争の軍事学的考察」 Michael Kofman (CAN, USA) “Russian Military Performance in Ukraine”; Vasily Kashin (Higher School of Economics, Russia) “The Russia-Ukraine War: Lessons for Defense Industry and Economics”

1月16日 SRC セミナー Karolína Skwarska (Institute of Slavonic Studies of the CAS, Czechia) “Сопоставительное изучение валентностей глаголов в славянских языках” [スラブ諸語における動詞の結合価の比較研究]

1月17日 早稲田大学ロシア東欧研究所特別セミナー 原田大輔(JOGMEC)「世界の石油ガス市場とロシア：最近の激震をめぐって」

1月31日 中村・鈴川基金奨励研究員報告会 廣田千恵子(千葉大学大学院博士後期課程)「モンゴル国カザフ人社会における装飾文化の継承とその背景：バヤン・ウルギー県を事例に」

人事の動き

研究員の異動

ANTONENKO, Viktoriia 学術研究員 2022年11月1日(採用)

事務職員の異動

亀田 望 事務補佐員 2022年11月30日(退職)

北海道でユーラシア史を考える

デイビッド・ムーン
(ユニバーシティ・カレッジ・ロンドン スラブ東欧研究院名誉教授/
センター外国人招へい教員)

<https://www.ucl.ac.uk/ssees/professor-david-moon>

札幌での最初の1日であった日曜日、時差ぼけと軽いカルチャー・ショックを受けていた私は、宿舎を出て大学のキャンパスへと南下した。11月初旬の明るく晴れた日。キャンパスはまるで秋を祝う公園のようだった。金、黄、赤に色づいた葉に覆われた木々。なかでもイチョウは見事だった。イングランド北東部出身の私には見慣れない木々。ここは異文化の地であると同時に、環境の異なる土地でもあったのだ。紳士に声を掛けられた。定年退職した後だという彼は少し訛った英語で丁寧に挨拶をすると、私にキャンパスを案内して欲しいかと尋ねた。彼はボランティア・ガイドだったのだ。我々は紅葉した木々に囲まれた穏やかな大野池や、ポプラ並木に行った。我々は古河記念講堂へと歩いて行った。そこは大学の近代的な建物とは対照的な古い木造の建物だった。彼は道すがら、この大学の起源である1876年に設立された札幌農学校について説明してくれた。さらに行くと、アメリカ合衆国マサチューセッツ農科大学の学長であったウィリアム・S・クラークの胸像に出くわすというサプライズがあった。彼は北海道開拓使の求めによって、農学校設立のための助言を行った人物である。日本帝国は当時——理由の1つとしては——樺太から南下してくる可能性のあったロシア帝国に対抗すべく、北海道と改名されたばかりであったこの島の新たな開拓地を「開発」しようとしていた。

そう、私は慣れ親しんだ土地にいたのだ。近年、私はロシア帝国がユーラシア草原に進出し——サハリンからは遠く離れているとはいえ——そこを入植地・開拓地としたことに注目して研究を進めている¹。ロシア人は、半乾燥の草原地帯を開拓し、ヨーロッパ式の耕作地へと変えた先駆者である。19世紀から20世紀にかけて、アメリカ合衆国政府はグレートプレーンズの入植地・開拓地においてロシア人の経験から学ん

¹ David Moon, *The Plough that Broke the Steppes: Agriculture and Environment on Russia's Grasslands, 1700–1914* (Oxford: Oxford University Press, 2013).

た²。このように、この時代には世界中の入植者植民国家のあいだで、知識の伝達が行われていたのである。私はロシア帝国/ソビエト連邦やアメリカ合衆国で、土地を奪われ、移住させられ、より劣悪な環境に置かれた先住民のことをよく知っていたので、北海道の先住民はどうだったのか知りたいと思った。

札幌滞在中、暇を見つけては博物館を訪れ、先住のアイヌ人や北海道の入植について知見を深めた。北海道博物館 (<https://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp/en/>) はとても印象的で、多くの学びを得た。この島の地質と人間の歴史とが、北と南、ロシアと日本とのあいだに島が位置することの意義や、アイヌの生活・文化・歴史と帝国日本の彼らに対する収奪と移住強制、さらには近代アイヌ人のライフストーリーを含めた近年の北海道の歴史を辿る形で紹介されていた。札幌から南へ90キロのところにある白老のアイヌ民族博物館 (<https://ainu-upopoy.jp/en/facility/museum/>) は、アイヌの生活と文化を見せるべく莫大な投資がなされている。美しく整えられた敷地には、展示物、民謡や踊りのパフォーマンス、さらには訪問者参加型の(私は弓矢を体験した)村がある。とても楽しい1日であったが、アイヌの生活や文化は過去のものであり、現代日本の北海道において博物館の外ではもはや重要な位置を占めていないという印象は拭えなかった。また、12月の晴天ながら寒く雪の積もった日に訪れた「北海道開拓の村」(<https://www.kaitaku.or.jp/en/>) も良かった。美しい敷地内にあるこの屋外博物館には、開拓使庁舎のレプリカをはじめ、当時の学校や住宅、店舗や会社など、1860年代から1920年代にかけての歴史建造物が集められている。この村は1983年に「北海道の重要な文化財を後世に残すために」開設された。そのようには明示されていないものの、ここは入植者植民地主義の博物館である。私は、入植者が追いやった先住民についての言及を無駄に探したが、入植者植民地主義の特徴の1つは、先住民を土地のみならず歴史からも抹消することだと思い直した。北海道の博物館を訪れながら、私は母国イギリスの博物館や遺跡について思いを巡らせていた。この国が帝国時代の植民地主義(のあらゆる側面)と奴隷制とを今に伝える遺産の数々に折り合いをつけ始めたのは、近年のことである。

環境史家として、私は常に自分が研究している歴史や環境と同様に、自分が身を置いている場所の歴史や環境に注意を払ってきたが、正直なところ、北海道からこれほど多くのことを学べるとは思っていなかった。SRCでの最初の講義では、北海道博物館での学びを基に話をした。「移民入植社会における知の東西移動——グレートプレーンズはいかにして「アメリカの大草原」となったのか」(<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/seminors/src/2022.html#20221129>) と題した講演において私は、まず明治時代のマサチューセッツから北海道への知識の伝達の話に触れ、アメリカ政府当局や入植者がいかにしてグレートプレーンズに千年住んでいた先住民の知識よりも、ユーラシア草原におけるロシアの入植者植民地主義の経験から学ぶことを選んだのかという私の議論を進めるための枕としたのである。ユーラシア草原からグレートプレーンズに伝えられた知識には、環境に適した作物の品種、ロシアの科学者が考案した土壌を理解するための新しい科学、風による乾燥から土地を守るための防風林を植える技術などがあった。これらの知識は、(メノー派入植者、ユダヤ系あるいは白系ロシア人亡命者からなる)移住者によって、あるいは科学者と政府の農業担当部局との直接のコンタクトによ

² David Moon, *The American Steppes: The Unexpected Russian Roots of Great Plains Agriculture, 1870s–1930s* (Cambridge: Cambridge University Press, 2020).

って伝えられたのである。

SRCでの2回目の講演では、私の専門分野であるユーラシア草原に焦点を当てた。諫早庸一助教の招きで、北海道中央ユーラシア研究会主催のワークショップ「草原の水系」(<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/casia/2022.html>)に参加し、「草原の川は干上がっていたのか——ロシア帝国における環境変化をめぐる議論」という題で報告を行った。私はドニプロ、ドン、ヴォルガ(イティル)、ヤイク(ウラル)といった諸河川に焦点を当てた。19世紀の間、いかにして教養あるロシア人たちが草原の川が干上がっているのではないかと懸念するようになったのかを論じた。彼らはこの現象が起きているのか、起きているとすればそれはなぜなのかを調査した。森林伐採が原因であると指摘する者たちもいた。これは、人間の行動が環境に悪影響を及ぼしているという、当時のロシア帝国や世界各地において広まっていた不安の一部であった。19世紀の河川に関する議論をより広い文脈でとらえるため、私は古代世界や中世イスラム世界、中華帝国やヨーロッパなど様々な背景を持つ人々が、何世紀にもわたって草原の河川を観察してきたことを見ていった。しかし、河川が干上がっているとは誰も思っていなかったのである。19世紀におけるこの懸念は、交通や通信のため、あるいは人間・家畜・作物のための水源として、さらにはアイデンティティ形成のなかでの草原の河川の重要性が認識されることによって増幅していった。ヴォルガ川をロシアの「母なる川」とする考え方は、この時期に育まれたのである。草原の河川の水位変動という「問題」に対する最終的な「解決」は、ソ連時代に河川を堰き止め、それを人口湖の連鎖に代えることでもたらされたが、これらの工学プロジェクトの淵源は前世紀にあった。このようなプロジェクトの結果は、今回のワークショップのもう一方、地田徹朗先生のペーパー「カザフスタンの小アラル海地域におけるアラル海災害からの復興に際しての牧畜の役割」のなかでも分析された。

草原の河川に関する私の研究は、北海道の先住民に対する私の新しい関心とはかけ離れているように見えるかもしれない。しかし、私が *Acta Slavica Iaponica* に掲載するために準備している論文では、モンゴル・タタールの遊牧民やスラブの農民など、川がその土地を流れてきた異なる人々の視点から、そして今日のウクライナ、ロシア連邦、カザフスタンにある河口からの視点から、川のことを考えようと思っている。

SRCでの講義に加え、池田嘉郎先生のお招きで東京大学の学生にロシア・ソビエト環境史の講義をする機会を得たことは、非常な喜びであった。講演の後、学生たちは活発な議論を展開し、その後近くのレストランで3人が昼食に参加してくれた。私は東京を訪れたことがなかったので、2日間東京を散策した後、新幹線で北海道の南端にある函館まで約4時間、そこからさらにのんびりと在来線で札幌まで素敵な旅をした。

環境史家として、私は常々環境が保護されている場所を訪れたいと考えており、北海道の中央部の山岳地帯にある大雪山国立公園で週末の1つを過ごした。層雲峡の温



「草原の水系」ワークショップでの報告

泉付きホテルでの贅沢で快適な滞在と、国立公園内でのガイドとのスノーシューハイキングとを組み合わせた旅であった。

最後に、スラブ・ユーラシア研究センターのセンター長、教員とスタッフの皆さんに心からお礼を申し上げ、私のエッセイを終わりにしたいと思う。このセンターでは常に、読書、思考、執筆、そして刺激的な会話、興味深いセミナーやシンポジウムから学ぶことができ、非常に有益であった。東方・北海道からのスラブ・ユーラシア世界へのアプローチは、私にこの世界に対する新たな視点を与えてくれた。(2023年1月25日)

(英語から諫早庸一訳)



スノーシューハイキング

SRC滞在を終えて

マーク・L・グリーンバーグ

(カンザス大学教養学部/センター外国人招へい教員)

SRCでの2か月にわたる滞在には感謝では言い表せないものがあります。読み、考え、書き、異なる視点を持つ新たな仲間と出会う機会がアメリカの人文学ではだいぶ難しくなってきました。加えて、ウクライナに対するロシアの戦争や私たちの研究分野に影響を及ぼすような他の政治的動乱によって、コミュニケーションのある種のラインが、切断はされずとも、弱められたのです。比較的穏やかなSRCの雰囲気や教職員の温かく親切なもてなしのおかげで、並外れて快適かつ実りある一時となりました。SRCセンター長の野町先生については特筆する必要があります。先生は私の専門のおよび個人的なニーズに応じてくれたのみならず、札幌だけでなく東京から、京都、沖縄に至る日本のあらゆる地域の研究者とのコンタクトを取り、共同研究を手配するために多くのことをしてくださいました。大久保さん、中嶋さん、大間知さんら多才で多言語を解する事務スタッフの方々からの支援も重要で、親しみがありつつも時折馴染みのない北大の環境での羅針盤となりました。

野町先生は昨年、日本文化では還暦は生まれ変わりを意味し、還暦を迎えた私も生まれ変わるだろうと言いました。確かに、札幌での日々のおかげで私はとても若返りました。歳には逆らえず、依然として日本語をマスターする目標は残念ながら実現されていません。しかし、ここにいる間に日本語について学んだことは、私が専門とする言語学の諸問題と思考法全般について新たな視座を与えてくれました。漢字の多様な読み方について知ることからは、記号の偶然性や文脈依存性、そして発話の意味についてより深くまた柔軟に考えさせられました。

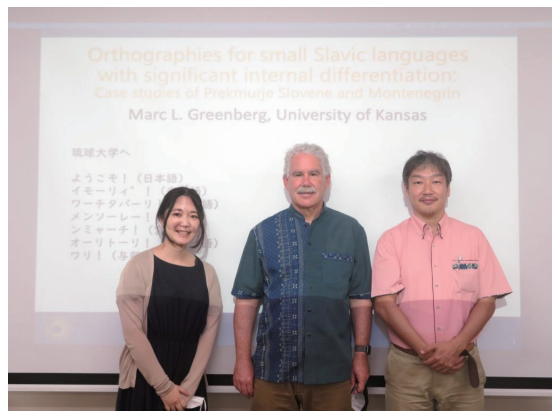
ニューズレターもまた歴史的瞬間を記録し今日そして未来におけるそのコンテキストを考える機会です。札幌での最初の週のことですが、東京の国立国語研究所の同僚たちを訪ねるために空港へ向かう道すがら、私を含めバスの乗客全員の携帯がJアラート

を受信しました¹。これは世界の権力構造が厳しい再交渉の最中であることを知らせる平壤からの備忘通知でした。日本からキーウそしてモスクワ、アスタナからワシントンDC、また京都大学での私の招待講演のテーマとなった言語闘争と権力闘争の場であるモンテネグロのツェティニェに至るまで、この再交渉を感じるができるでしょう。

11月9日、私が62歳の誕生日を迎えた日に、私は米中間選挙の開票速報に釘付けになりました。私は母国で民主主義が不可逆的に損なわれる可能性を最も懸念していたのですが、中嶋さんは「アメリカ政治は世界に政治・経済的影響を及ぼすのだから」、よかれあしかれ誰もが結果を心配していると賢明にも指摘してくれました。私たちの知的営為において世界の相互関連性は第一に考えられなければなりません。

私とSRCの関係について考える上で触れなければならないことがあります。2000年に刊行したスロベニア語歴史音韻論の謝辞を再読したとき、当時札幌に滞在中だった責任編集者のポール・ウェクスラー氏が多くの時間を割いて本書の執筆に関して助言してくれたことを思い出したのです²。2022年秋のSRCでの私の課題の一つは、私の次の著作を執筆する文脈で、言語の実態と社会言語学的な文脈のさまざまな問題を深く検討することでした。その本は同じ由緒あるシリーズ『スラブ諸語歴史音韻論』(Universitätsverlag Carl Winter, Heidelberg)で計画中です。その時からほぼ四半世紀が過ぎた今日、ウェクスラー先生と同じ立場になるという夢が叶いました。スラブ・ユーラシア地域へ貢献するために、同じ豊かな資料を用いて思索し、知識を構築することができたのです。

ここでの私の滞在目的は、ボスニア語、クロアチア語、モンテネグロ語、セルビア語の通時音韻論を議論する上で必要な枠組みを発展させることでした。これらの標準語となる運命を辿った諸方言の有機的発展を記述するには、紀元1000年期末に遡る膨大な構造的変化の出現についての説明から、言語イデオロギーに関連する非常に問題の多い社会言語学的な問題にまで言及しなければなりません。国立国語研究所、京都大学、琉球大学で行った一連の招待講演では、日本各地の指導的な研究者や優秀な学生と意見を共有する機会を得ました。私は自分が与えたよりも多くを受け取ったのですが、その中には重要なフィードバックや共同研究への関心、また日本語学や日琉語族研究の立場からの新たな視点もありました。これらはみな、計画中の著作や、もちろん、将来的に書く予定の全ての研究で取り上げる多様なテーマを考える上で糧となり助けとなるでしょう。ここでは考察予定の内容の一端を紹介するに留めます。スラブ語におけるピッチアクセントシステム類型論の高度な研究は、南スラブ諸語の語韻律システムが、どのように発生し、発展したのかをより



琉球大学にて：向かって左より當山氏、筆者、野町氏

¹ 2022年10月4日に北朝鮮が弾道ミサイルを発射したことに伴って発令された全国瞬時警報システム(Jアラート)のこと。

² Mark L. Greenberg, *A Historical Phonology of the Slovene Language* (Heidelberg: Universitätsverlag C. Winter, 2000), p. 10.

よく理解する一助となりました。発生的関連はあるものの、かなり分化している琉球諸語と日本語の関係を理解することで、歴史と言語変種との関係を理解するための鋭敏な感覚を手に入れました。私たちはまた、共同研究の新たな路線を開く視座と共に、沖縄とモンテネグロの仲間たちを結び付けましたのです。

国立国語研究所のある優れた研究者は、私の招待講演がスラブ語学と日本語学を橋渡しする一助になったと述べました。日本語で「橋」を意味する単語「ハシ」は上昇ピッチになります。私の日本での共同研究を通じた交流が、SRCのサポートの結果、これから架かる多くの橋の一つであることを願います。これらの橋から、私たちは川の流れを見ることができます。今日そして未来に、お互いを豊かにする友人や研究者への出会いを求めて私たちは橋を渡り続けることでしょう。(2022年11月)

(英語から三栖大明訳)



充実した学術的交流と日本各地の美しい秋を満喫しました

学界短信

学会カレンダー

2023年	2月13-18日	3rd ABS (Association for Borderlands Studies) World Conference 於ベングリオン大学 https://world.absborderlands.org/
	2月21-22日	スラブ・ユーラシア研究センター生存戦略研究プラットフォーム国際シンポジウム「ウクライナとロシアの生存戦略」 於SRC (オンライン併用) https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/sympo/2023ssp/index.html
	3月18-19日	日本中央アジア学会2022年度年次大会 於アジア経済研究所 (オンライン併用) http://www.jacas.jp
	3月30日	日本スラヴ学研究会2022年度研究発表会 (オンライン) https://sites.google.com/view/jsssl/home
	3月31日 -4月2日	BASEES (British Association for Slavonic and East European Studies) Conference 2023 於グラスゴー大学 (一部オンライン併用) https://www.baseesconference.org
	4月12-15日	ABS (Association for Borderlands Studies) Annual Conference 於アリゾナ州テンピ https://absborderlands.org/meetings/abs-annual-conference/
	5月18-20日	27th Annual World Convention of the Association for the Study of Nationalities (ASN) 於コロンビア大学 https://www.asnconvention.com/
	6月3-4日	比較経済体制学会第63回大会 於神奈川大学 http://www.jaces.info/info.html
	6月17-18日	日本比較政治学会第26回大会 於山梨大学 https://www.jacpnet.org/convention/
	7月13-14日	スラブ・ユーラシア研究センター 2023年度夏期国際シンポジウム 於SRC
	10月19-22日	Central Eurasian Studies Society (CESS) Annual Conference 2023 於ピッツバーグ大学 https://www.centraleurasia.org/conferences/annual/
	10月21-22日	日本ロシア文学会第73回全国大会 於富山大学五福キャンパス https://yaar.jp/
	10月28-29日	ロシア史研究会2023年度大会 於九州大学 https://www.roshiashi.com
	11月4-5日	ロシア・東欧学会2023年度研究大会 於京都大学 https://www.jarees.jp
	11月10-12日	日本国際政治学会2023年度研究大会 於福岡国際国際会議場 https://jair.or.jp/
	11月30日 -12月3日	ASEEES (Association for Slavic, East European, and Eurasian Studies) Annual Convention 於フィラデルフィア https://www.aseees.org/convention

編集部だより

Eurasia Border Review

本誌第2期シリーズの2号目となる12号が刊行されました。今回は、ロシアのウクライナ侵攻と日本の対応の特集です。日本語で刊行されたエッセイなどのアップデート版でもあり、ケナン研究所との共催セミナーなどのプレゼンにも用いられました。目次は以下の通りです。[岩下]

Eurasia Border Review, Second Series, Volume 12, Fall 2022

Hyunjoo Naomi Chi & Edward Boyle, “Preface: Russia, Ukraine and Japan in Eurasia”

Akihiro Iwashita, “The Russian War in Ukraine: An Invasion Named ‘Liberation’”

Shinichiro Tabata, “Impact of Economic Sanctions on the Russian Economy (As of October 17, 2022)”

Akihiro Iwashita, “Epitaph to a Post-Cold War World: Russia Remakes the International Order and a Crisis for Japan”

なお、上記の論文は以下のサイトからダウンロードできます。

https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/publicitn/eurasia_border_review/vol12.html

会 議

センター協議員会

2022 年度第 8 回 11 月 24 日（オンライン開催）

議題

1. 教員人事 1 について
2. 教員人事 2 について
3. 外国の機関との協定の締結について

2022 年度第 9 回 12 月 19 日（オンライン開催）

議題

1. 教員人事について

2022 年度第 10 回 12 月 19 ～ 26 日（メール会議）

議題

1. 教員人事について

2022 年度第 11 回 1 月 30 日（オンライン開催）

議題

1. センター規程の一部改正について
2. 令和 5 年度客員研究員の採用及び称号付与について

センター共同利用・共同研究拠点運営委員会

2022年度第1回 1月20日（オンライン開催）

議題

1. スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員の選考について

センター共同利用・共同研究拠点課題等審査委員会

2022年度第1回 1月20日（オンライン開催）

議題

1. 共同利用・共同研究公募課題の審査について

[事務係]

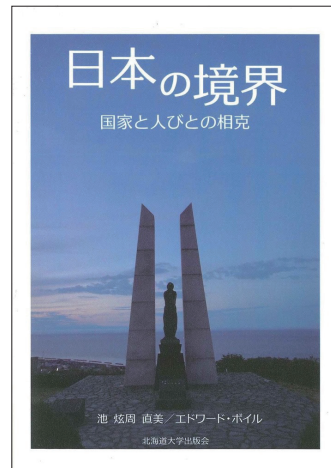
みせらねあ

池炫周直美、エドワード・ボイル編著

『日本の境界：国家と人びとの相克』（北海道大学出版会）刊行

人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業「東ユーラシア研究」およびスラブ・ユーラシア研究センターのプロジェクト「国際的な生存戦略プラットフォームの構築」の成果のひとつとして、池炫周直美、エドワード・ボイル編著『日本の境界：国家と人びとの相克』が北海道大学出版会から出版されました。

本書は、地理的な国境変更や国境政策のみならず、境界地域に暮らす人々の意識の多層性や変容、難民受け入れや外国人労働者問題、無国籍など人びとの視座からみた国家の境界性を考察するとともに、現在の日本が抱える社会問題を、境界をキーワードに国家と人びとの相克として分析したものです。以下が目次です。[岩下]



序論 日本の境界・国境を問う

…エマニュエル・ブルネイ=ジェイ、池炫周直美、エドワード・ボイル

第1部 境界地域と国のかたち

第1章 「フロンティア北海道」を考える…ノウェル・ウィルソン

第2章 国境を築く：「北方領土」に関するアクター、利害、象徴…アレクサンダー・ブフ

第3章 「引きちぎられた」南の境界：「日本」と沖縄と奄美のあいだ…天野尚樹

第2部 難民、移民、無国籍

第4章 引揚を難民として考える：大日本帝国崩壊の再評価…ジョナサン・ブル

- 第5章 「難民」という名の言説：脱北、シリア、ジェンダー…大茂矢由佳、明石純一
第6章 日本における「移民の第3の波」？…池 炫周 直美
第7章 無国籍：国家からこぼれ落ちた人びと…陳 天璽
第3部 国のかたちを考える
第8章 「砦」としての国境保全政策：包括的な視点から…古川浩司
第9章 国家と人びとの相克：北方領土問題を題材に…岩下明裕
結びにかえて…岩下明裕、エドワード・ボイル

共同研究員の活躍：古宮路子さんの受賞

東京大学助教で当センター共同研究員の古宮路子（こみや・みちこ）さんが、日本の学術研究の将来のリーダーと期待される日本学術振興会賞の第19回受賞者に選ばれました。対象となった研究「ユーリー・オレーシャ『羨望』の生成過程解明に基づいたソ連前期ロシア文学史の実証的研究」は、微視的な草稿研究を通して作家の創作活動を丁寧に論じると同時に、より広い文化史的な視野から、1920—30年代のソ連という時代的な文脈における知識人の位置づけを解明することに成功したと評価されました。国際的レベルで20世紀ロシア文学研究の最前線にたつ若手研究者として、より広い視点に立ったさらなる研究の展開が期待されています。古宮さん、おめでとうございます。

古宮さんは2019年度から4年間にわたってセンターの共同利用・共同研究拠点公募研究「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」共同研究班の班員を務めてくださっています。センターでは古宮さんの受賞を記念して、講演会「ソ連知識人オレーシャの苦悩：ヴォロージャ像をめぐって（『オレーシャ『羨望』草稿研究：人物造形の軌跡』より）」を、2月14日（火）に対面・オンラインのハイブリッドで開催します。詳細は北海道スラブ研究会のHP（<https://src-h.slav.hokudai.ac.jp/jp/seminors/slav/slav-info.html>）でご確認ください。[安達]

過去の中村・鈴川基金奨励研究員の活躍：畔柳千明さんの受賞

東京大学大学院博士課程に在籍する畔柳千明（くろやなぎ・ちあき）さんが、日本ロシア文学会の推薦を受け、第13回日本学術振興会育志賞を受賞されました。同賞は将来、我が国の学術研究の発展に寄与することが期待される優秀な大学院博士後期課程学生を顕彰するものです。

畔柳さんは、「ロシア帝国の北京宗教使節団の研究：東西交流史から見た18-19世紀ロシア・中国関係」を博士課程の研究テーマとされています。センターには、2018年度の中村・鈴川基金奨励研究員として「北京宣教団とゴロフキン使節派遣後のロシアの対清政策」をテーマに滞在されました。

畔柳さん、おめでとうございます。[安達]

専任研究員消息

野町素己研究員は、11月4日～11月9日の間、「第11回マケドニア・北米学会」出席・研究報告、研究打合せのため、アメリカ(テンピ)に出張。12月20日～12月30日の間、講演会での成果報告、資料収集のためボスニア(サラエボ)とセルビア(ベオグラード)へ出張。1月23日～1月31日の間、研究打合せのため、メルボルン、キャンベラ、シドニー(オーストラリア)へ出張。

田畑伸一郎研究員は、11月10日～11月19日の間、54th ASEES Annual Convention参加、セミナー出席のため、アメリカ(シカゴ、ワシントン、ケンブリッジ)に出張。

ウルフ・ディビッド研究員は、11月10日～12月2日の間、セミナー「Eurasia from the East: Japanese Views」出席・研究報告、セミナー「How Revolutionary Russia Began to Shape the Middle East: A Biographical Vision」出席・研究報告、研究打合せのため、アメリカ(シカゴ、ワシントン、ケンブリッジ、ニューヨーク)に出張。

長縄宣博研究員は、11月10日～11月19日の間、セミナー「Eurasia from the East: Japanese Views」出席・研究報告、セミナー「How Revolutionary Russia Began to Shape the Middle East: A Biographical Vision」出席・研究報告のため、アメリカ(シカゴ、ワシントン、ニューヘイブン、ケンブリッジ)に出張。

岩下明裕研究員は、11月12日～11月17日の間、セミナー事前準備および出席、研究打ち合わせのため、アメリカ(ワシントン、サンディエゴ)に出張。

宇山智彦研究員は、11月18日～11月26日の間、ウズベキスタンの大学での国際関係に関する講演のため、ウズベキスタン(タシケント、ウルゲンチ)に出張。[事務係]

目 次

研究の最前線	1
国際シンポジウム《ウクライナとロシアの生存戦略：開戦から1年を迎えて》開催予 告／2022年度冬期国際シンポジウムの開催／CNCSI（国際19世紀研究センター） に加盟／生存戦略研究／人間文化研究機構グローバル地域研究推進事業「東ユー ラシア研究」プロジェクト2022年度四拠点全体集会開催／境界地域研究ネットワ ークJAPAN（JIBSN）セミナー2022「危機のなかの境界地域」開催：3年ぶりに対 面で／UBRJ・EESセミナー「危機のなかのボーダースタディーズ」開催／ラウンド テーブル「東部ヨーロッパ境界地域に関する歴史研究の再考ーロシアによるウクラ イナ戦争の余波」開催／2023年度外国人招へい教員（外国人研究員）の決定／専 任研究員セミナー／研究会活動	
人事の動き	16
研究員の異動／事務職員の異動	
北海道でユーラシア史を考える	16
by デイビッド・ムーン	
SRC 滞在を終えて	19
by マーク・L・グリーンバーグ	
学界短信	22
学会カレンダー	
編集室だより	23
<i>Eurasia Border Review</i>	
会議	23
センター協議委員会／センター共同利用・共同研究拠点運営委員会／センター共同 利用・共同研究拠点課題等審査委員会	
みせらねあ	24
池炫周直美、エドワード・ボイル編著『日本の境界：国家と人びとの相克』（北 海道大学出版会）刊行／共同研究員の活躍：古宮路子さんの受賞／過去の中村・鈴 川基金奨励研究員の活躍：畔柳千明さんの受賞／専任研究員消息	

2023年2月9日発行

編集	宇山智彦
編集協力	ベクトウルスノフ・ミルラン
DTP 編集	ささやめぐみ
発行者	野町素己
発行所	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター 060-0809 札幌市北区北9条西7丁目 Tel.011-706-3156、706-2388 Fax.011-706-4952 インターネットホームページ： http://src-h.slav.hokudai.ac.jp/
